

横浜お三の宮大祭の文化的再生産
——現在の大祭と社会文化的背景をめぐって——

小 松 秀 雄

Summary

Cultural reproduction of Osannomiya-*taisai* in Yokohama

— Sociological Study on the social process of cultural reproduction of Osannomiya-*taisai* —

Hideo Komatsu

Hie-jinja (shrine) lies in the center of Yokohama City, Sanou-cho Minami Ward, and is called Osannomiya. Osannomiya-*taisai* (matsuri) or Hie-jinja reitaisai (matsuri) takes place in mid-September and lasts three days. Various other festivals (matsuris) indeed are held around Yokohama City, but Osannomiya-*taisai* is the biggest traditional event (matsuri). Many inhabitants and portable shrines (mikoshis) participate in this festival. Osannomiya-*taisai* includes several rituals and mikoshi parades. The largest and most impressive parade that is called rengou-togyo is performed in the shopping quarters, Isezaki-cho syoutengai.

In this paper, according to the sociology of Pierre Bourdieu and the theory of subculture I make clear how inhabitants (ujikos of Hie-jinja) have managed Osannomiya-*taisai* for a long time. About forty neighborhood associations (chonaikai or jichikai) in ujiko-kuiki of Hie-jinja participate in this festival and organize a festival committee office (saireiinkai). Inhabitants learn the skills of management (habitus or le sens pratique) from various activities (pratique) that they are doing in the neighborhood association. They can run a festival committee office (saireiinkai) through practicing the skill of management (habitus). Then a large number of shopkeepers and craftsmen in ujiko-kuiki have performed the mikoshi parade according to their own habitus or le sens pratique that have been learned from doing their everyday life (pratique).

お三の宮大祭（日枝神社例大祭）は、横浜という大都市の発祥の地で今もなお続けられている盛大な祭礼である。江戸時代も終末を迎える1859年に開港場が建設され始めたが、その当時は横浜は沼地の多い一寒村に過ぎなかった。しかし、近代国家建設という日本の国家プロジェクトに組み込まれて開港場の建設は急ピッチで進められ、明治22年の市制施行時には既に13万人近い人口に達したミナト横浜はその後も拡大を続け、明治末年には東京と大阪に次いで、京都、名古屋、神戸に並ぶ大都市になった。お三の宮大祭（日枝神社例大祭）も明治の終わり頃から大正期には横浜の経済的文化的力を背景に、現在のようなスケールの大きい祭礼になったのではなかろうか。厳密な歴史的な考察はもう少し調査研究を続けてから試みたい。ただ、関東大震災と第二次世界大戦という二度の災禍によって氏子区域は壊滅的被害を受けたために、恐らく詳しい歴史資料は残っていないと思われるから、明治時代からの祭礼の足跡を辿ることは極めて難しい。そのような難問は今後の研究課題としておく。本稿では、現在の氏子地域と例大祭の概要を紹介し、その後で祭礼が現在に至るまで続いている理由や背景について、ピエール・ブルデュエ等の文化的再生産理論と都市社会学の下位文化論を参考にしながら再検討してみたい。

(注) お三の宮大祭（日枝神社例大祭）：横浜市南区山王町の日枝神社は、地元では「お三の宮」「お三さん」という名称で親しまれており、例大祭も「お三の宮大祭」と呼ばれることが多い。したがって、本稿でも「お三の宮大祭」という言葉を題目に使うが、必要な場合には適宜日枝神社例大祭という言葉を使う。

1 調査地域の概要

(1) 横浜市南区お三の宮（日枝神社）

日枝神社は全国に数多くあるばかりでなく横浜市内にも複数あるが、本調査研究が対象とする日枝神社は横浜市南区山王町5丁目32番地に鎮座する神社である（本論文に掲載した地図を参照のこと）。神奈川県神社誌や神社辞典、あるいは当該日枝神社社務所が刊行している略誌等の資料があるので、ここで改めて同じ説明を繰り返すことは差し控えたい。差し当たり必要な範囲で重要なポイントに限定して、関連する資料を参考にしながらプロフィールを紹介しよう。

日枝神社の創建は横浜の歴史とは切り離せない。これほど神社と地域社会との関連が密接な所も珍しいのではなかろうか。江戸時代の初めまではほとんどが沼地と入り海であった現在の横浜の地で本格的な開発と開墾が始まったのは千六百年代の中頃からである。江戸在住の大名諸家御用達木石商吉田勘兵衛が横浜の地で新田の開発を計画し、明暦年間に着工し寛文7年まで埋め立てを行い、百十六町歩余りの新田を造成した。1650年代から60年代まで十数年に及ぶ歳月を要した大工事である。吉田勘兵衛の新田開発によって現在の横浜の地形が出来上がったわけではなく、いぜんとして沼地のような場所が多かった。1859年の開港を契機とする港湾

建設を通じて、明治時代になってようやく多種多様な建物と施設が立地する市街地になった。しかし、横浜が地域社会らしい形になる基礎を築いたのはやはり吉田勘兵衛であり、彼は地域社会建設の最大の功労者と言えよう。

近世当初の横浜の中心地は吉田勘兵衛の功労が認められ、吉田新田という名前で呼ばれるようになったが、勘兵衛は新田の鎮守のために江戸の山王社（日枝神社）の分霊を勧請し神社を創建した。その辺りの経緯に関しては日枝神社略誌から関連する文章を引用しておきたい。

「旧は山王社 稲荷社と称し、世俗お三の宮と謂う、寛文十三年九月十日吉田新田開拓者贈従五位吉田勘兵衛尉良信の創建する所也。——勘兵衛創立に方り大乘経を一部埋納して地鎮祭を行う民間訛伝して新田埋立の人柱となりし、お三の霊をまつる所なりと云う。固より附会の説也。日枝神社は、初めは山王大権現又は山王宮と称せられ、山王の宮が転訛しておさんの宮となり、おさんの伝説を附会しお三の宮と書かれるに至った。このことに就て吉田新田の山王社（日枝神社）は、近江国比叡山の日吉を本源とせる江戸の山王社（日枝神社）の勧請であるが、江戸の山王社は、近江日吉山王二十一社のうち、大宮・二ノ宮・三ノ宮であるから、この地の山王社もこの三社の分霊を祀ってお三ノ宮と称したのではないかという説がある。」（『お三の宮 日枝神社 略誌』3頁）

一般に神社やお寺の由来とか由緒の領域は様々な伝説、言い伝え、伝承、神話などが豊富であり、事実の真偽を問えない場合も少なくない。お寺の創建にまつわる弘法大師伝説や行基伝説は全国に満ちあふれているけれども、本当に弘法大師が創建したとは思えない「ウソっぽい」事例も多い。ただ、事実の真偽よりも、そのように語られ言い伝えられながら、お寺が地域と密接な関わりを持ち続けてきた事実の重みを尊重しなければならない。横浜の日枝神社ないしはお三の宮の場合にも、神社略誌が語る内容を多くの地域住民も抱き続け、神社と祭礼を存続させてきた事実は認めなければならない。科学的言説は真偽を問われながら、進歩しなければならない使命を背負っているのに対し、宗教＝信仰に関わる領域の言説は真偽よりも実践されてきたどうかの方が重要な問題になるだろう。話がわき道にそれてしまうので言説の考察はひとまず置いて、吉田勘兵衛の新田開発によって横浜の地域社会の建設が始まると同時に、地域の信仰の核となる日枝神社も創建されたことだけは強調しておきたい。

近世初期に創祀された日枝神社のその後の歩みについては、しばしば横浜が開港直前まで一寒村に過ぎなかったといわれるように、鎮守である日枝神社も近代以前は一寒村の社に過ぎなかったと見なされるかもしれない。横浜は急激な社会変動、震災、戦災などの度重なる災禍に見舞われたために、残念ながら日枝神社の詳しい歴史的資料は残されていない。神官または神職の業務記録があれば神社の姿もリアルに想像できるけれども、現在の角井宮司に伺っても古い資料は何も残っていないとのことであり、神社の近世史はこれ以上語れない。当地の資料以外で日枝神社が記録に登場するのは近代以降である。明治維新の神仏分離から始まる国家神道的な体制の歴史の中で、当地の日枝神社は「横浜村ないしは近隣の村の神社」という格を与られている。神社の格（いわゆる社格）は今では余り意識されないし住民にとっては重要な意味を持つことはないが、歴史の話の中では避けて通ることはできないようである。細かい基準

はともかくとして、社格は神社の創建の古さ、国家神道体制の中での位置づけ等をおよその基準に作成されている。その意味では横浜市内の神社は、全体として余り高くない格づけをされていても仕方がないかもしれない。吉田勤兵衛という民間の商人が、江戸時代という近世になって創建した場合には、「村の神社」にならざるを得ない。

社格とは別に、明治時代後半から急速に横浜の人口が増えるに従い、氏子となる地域社会も拡大して盛大な祭礼が行われるようになっていった。それとは逆に、創建が古くしかも国家にとって由緒正しい神社は高い格づけをされても、近代の人口変動と社会変動の過程で氏子地域が急速に力を失っていった場合には社格にふさわしい祭礼を実施することができなくなる。お三の宮の例大祭に関しては、横浜市内はもとより神奈川県内でも屈指の規模を誇る祭礼になっている。

(2) お三の宮（日枝神社）の氏子地域

調査研究の対象地域は日枝神社の氏子地域になるが、明治時代以降は地域社会の外観も人口も一変してしまう。また、明治時代以降でも市街地拡大に対応するために、地域内の行政区画と名称が変更されている。取りあえず最初に、お三の宮大祭のパンフレットを参考にして現在の氏子地域を掲載しておく（本論文に掲載した地図を参照）。

- ・中区伊勢佐木地区：吉田町、伊勢佐木町1～7丁目、末吉町1～4丁目、若葉町1～3丁目、福富町東通・仲通・西通、伊勢佐木長者町5～9丁目、曙町1～5丁目、弥生町1～5丁目、その他には神輿を出していない地域として末広町、羽衣町、蓬萊町
- ・南区寿東部地区：永楽町1～2丁目、真金町1～2丁目、万世町1～2町、高根町1～4丁目、白妙町1～5丁目、浦舟町1～5丁目
- ・南区宮本（お三の宮）地区：日枝町1～5丁目、南吉田町1～5丁目、山王町1～5丁目、吉野町1～5丁目、新川町1～5丁目、二葉町1～4丁目、高砂町1～3丁目
- ・中区埋地地区：山吹町、富士見町、長者町1・3・4丁目、三吉町、千歳町、山田町

氏子地域と言っても戦前とは異なり、町の住民全体がそのまま自動的に氏子になるわけではない。すなわち、昔からの慣例上、一応の目安として「この町は日枝神社の氏子の地域になります」ということであり、洗礼や加入儀礼などを通過して氏子集団に入るわけではない。現代社会においては、かつてのような厳格な制度宗教と教団宗教の形態は崩れてきており、宗教全体に曖昧な部分とボーダーレスな領域が拡がりつつある。殊に大都市では住民の移動が激しいので、氏子意識ばかりでなく「どこそこの神社の氏子地域に住んでいるということ」すら、なかなか自覚されにくい。それだけに神社の祭礼は氏子地域の目安を知らせる格好の機会となるだろう。日枝神社の氏子地域に関して注意しておきたい点を挙げると、南区の寿東部地区と宮本地区、並びに中区伊勢佐木地区はほぼ町単位で氏子地域を考えていくことができるのに対し、中区の埋地地区の場合はそう簡単には地域区分できない。町単位よりは自治会とか町内会の単位で氏子地域を確認していかなければならないようである。

住民の氏子意識ないしは感覚の強弱（濃淡）と中身は地域によって変わる。現地調査の経験

から推測すれば、宮本地区の町では住民の大半は神社に近いだけに明確な氏子意識を持ち合わせている。寿東部地区の住民も全体として宮本地区の住民ほどではないが、類似した氏子意識や感覚を持っているように思われる。伊勢佐木地区の場合には商店街の組合のメンバーの方々はお三の宮という存在を身近に感じているようであるが、普通のサラリーマンの方は神社そのものを余り意識していないようである。埋地地区は今では神輿や山車を出していないために、一般の住民にとって日枝神社とかお三の宮は頭に浮かばないようである。当地域に限らず、新しく移住してきた住民（いわゆる新住民）、外部の会社に通うサラリーマン、若者は氏子意識＝感覚との親和性は高くない。居住歴、職業、年齢が氏子意識＝感覚を検討する際の目安となる。

ところで、1の日枝神社のところで指摘したように、上記の氏子地域は吉田勤兵衛が開発した新田を中心とする地域であり、その後の社会変動にもかかわらず大幅な変更はされていない。明治維新の神仏分離、明治時代の急激な都市化、明治から大正期の神社の統廃合、第二次大戦後の政教分離政策、戦後の横浜の都市改造など、日枝神社を取り巻く環境は目まぐるしく変わったけれども、神社の氏子地域と言われている地理的な範囲は意外にもほとんど変わっていない。もちろん、吉田新田、横浜村、建設期の開港場横浜、モダニズムの大都市横浜、二十一世紀に向かう現代都市横浜という形で横浜の市街地の歩みを総括すれば、氏子地域の外観（生態学的形態学的側面）、社会組織の制度と形態、文化的な要素、住民の行動と意識は時代の流れを反映するかのように変化している。日枝神社（お三の宮）は昔も今もほとんど同じ所に鎮座して、そのような激しい変貌と変動を見つめてきた。何かしら不思議な気がする。

2 現在のお三の宮大祭（日枝神社例大祭）

ここでは9月中旬に行われる現在の日枝神社例大祭（お三の宮大祭）の姿を概観してみたい。「現在の」という限定をつけたので、筆者が参加観察した平成5年度から8年度までの例大祭の実践と、『お三の宮祭平成三年度 OUR HOME TOWN YOKOHAMA』という祭りの写真集とを中心に、各種の祭りのパンフレットとチラシ（収集した資料）を参考にしながらおおよその姿を描き出してみることにする。

祭礼の日程は9月13日から15日までの三日間ということで、この数年は一定している。参加する地区と町内、行事の内容、やり方、場所、準備の日程なども細かい点を除けばほとんど変わっていない。本祭り（ほんまつり）または表（おもて）と、陰（影）祭り（かげまつり）または裏（うら）とを隔年で行い、本祭りの時には氏子地区全体が参加する連合渡御があるのに対して、陰祭りには連合渡御がなく寿東部地区以外はほとんど神輿を出さない。最近では奇数年の平成3, 5, 7年度の祭礼が本祭りであり、偶数年の平成4, 6, 8年度の祭礼が陰祭りになる。隔年でやり方を変える方式は戦後になって定着したらしいが、祭礼の日程や実践方法の歴史的な変遷に関する詳しい考察は別の機会に譲りたい。差し当たり近年のやり方と日程で考えていきたい。

(1) 本祭り（ほんまつり・おもて）

日枝神社例大祭の全ての行事が見られるのは本祭りの年であり、最初に本祭りの様子を取り

上げてみたい。最近ではコンピュータやワープロなどの情報機器が発達し安価にもなっているために、文字、図表、絵が入ったパンフレットとチラシを印刷の専門家でもない市民でも手軽に作成できるようになってきた。お三の宮大祭に関しても多様なパンフレットとチラシが作られているので、それらを集めて総合していけば本祭りの大体の様子は描き出せるだろう。そのような言説レベルの資料は確かに有用とはいえ、実践（プラチック・プラクティス）レベルの具体的な機微や様相は何度も参加して当事者たちに接してみなければ分からない。ここでは言説レベルの資料と実践レベルの具体的な様相とを適当に織り交ぜていくつもりである。

言説レベルでは祭礼の全体像は、本祭りの時に作成されるピンク色の「関外総鎮守奉祝お三の宮大祭」と、8月初めに開催される各町代表祭礼委員会の資料「各町祭礼委員様—お三の宮日枝神社」とでおよそのことが理解できるだろう。ピンク色のチラシを開けると各町内神輿台数という一覧表に、参加する地区と町内がまとめられている。伊勢佐木、寿東部、宮本、埋地の四つの地区に分けられ、その中でさらに町内会単位で組織が作られている。神酒所（みきしょ）を設置し神輿を出す町内会の数は伊勢佐木16、寿東部10、宮本8であり、そこに主に祭礼費の寄付という形で参加する埋地地区の7町が加わる。他の祭りと比べて、この祭りのやり方で重要な特徴になっているのが町内会組織方式であろう。地域社会と伝統的な行事やイベントとの関連だけでなく行事やイベントの性格、持続性、変動を考える際に、実践方法の中でも組織方式が非常に重要なポイントになる。町内会組織方式の詳しい検討は別のところで試みることにする。

●9月13日—日枝神社の式典と各町内の神酒所での御魂入れ—：行事日程を見ると、まず9月13日の夕方5時から日枝神社にて式典が執り行われる。本殿と拝殿の前で行われる厳粛な神事であり、参列者は神社の責任役員（吉田貞一郎・宗像幸雄・石渡清元の三氏）、地区連合委員長四名、各町代表祭礼委員等である。角井宮司他の数人の神職がお祓い、神饌の供進、祝詞奏上等々の儀式を進めながら本殿から拝殿へと屋内で動くのに対し、参列者は小高い木々の下に並ぶ椅子に腰を下ろし、神妙な態度で本殿に向かい合っている。今の神道の祭典の式次第に則って執り行われ、辺りが暗くなる夕方6時頃に参列者が神を奉納して終了する。この後、各町の代表は町内の神酒所に戻り御魂入れ（みたまいれ）の儀式に臨む。一般にどこの祭りでも渡御と巡行の場合には神様（ご神体）が神輿などの乗り物に乗って社から町中に出ていくことになるが、ご神体＝御魂を乗り物に移す儀式が必ずと言っていいくらい行われる。お三の宮大祭でも13日の夜7時前後から三十四ほどある神酒所で、御魂入れと呼ばれるミニ儀式が順次行われるが、神職が手分けして車で回る。既に外は真っ暗になった頃、神酒所の祭壇の前に町内の祭礼委員が並び、それぞれ自慢の神輿にご神体＝御魂が入れられる。それが済まない神輿を巡行しても、住民にとっては宗教的な意味というか、功德やありがたみのようなものは感じられないかもしれない。厳粛な神事を基点にしてこそ、華やかな祝祭の行事も盛り上がるのではなかろうか。御魂入れが済むと、肩入れと呼ばれる初めての町内巡行が行われる。担ぎ初め、肩をならす、神輿の担ぎ棒に肩を通すなどの意味合いがあるのだろうか。

ところで、祭りは天候にも左右されることが多い。思わぬ悪天候のために日程、行事、場所

が変更されることもあるが、神社での厳粛な神事は余程のことがない限り中止されたりすることはあり得ない。日枝神社例大祭の13日の式典も、平成6年度のように雨の中で執行されたこともある。次に述べる14日の大神輿御巡行と15日の連合渡御は屋外が舞台となる行事なので、雨がひどい時には中止される。平成6年度は陰祭りの年であったとはいえ、15日に予定されていた大神輿御巡行は朝から降り続く雨のために残念ながら中止された。また、平成7年度の15日の連合渡御も雨のためにコースと行事予定が大幅に短縮されてしまった。

●9月14日一日枝神社大神輿御巡行と各町内の町神輿巡行一：13日の夜は町内ごとに様々な催しがあるが、全体に関わる行事だけを取り上げることにしたい。明けて14日は神社の大神輿の巡行がある。横浜に限らず関東には町神輿がかなり普及しており、西日本のだんじりと太鼓台、京都から琵琶湖岸、並びに岐阜から名古屋にかけて分布する山車（祇園祭・大津祭・高山祭・半田祭などの山車）に匹敵する賑わしの祭具となる。そのような町神輿とは別に、神社の神事に欠かせない神聖な神輿がある。日枝神社の大神輿は当神社の各種のパンフレットにもしばしば書かれているように、昭和9年に半年余りかけて製作されたもので市内では最大の神具であるという。住民の経済力が高まる大正期になると、各町の住民たちは自らの力を誇るために次第に町神輿を豪華なものに仕上げるようになった。神社の神輿が町の神輿に比べ貧弱なものであれば神社の面目が立たない。町内にある多数の神輿の頂点に立つためには、それだけの威容を備えた大神輿が必要になったのだろう。氏子住民から見ても、堂々たる大神輿が巡行するならば自然と供奉したくなり、また喜んで迎えたくなるだろう。

14日の大神輿は朝9時30分に神社の神輿庫を出御する。地区の委員長、責任役員、宮本地区各町祭礼委員が神輿庫前に9時に集まり出御式を済ませた後、行列を組んで出発する。行列の順序、構成、コースは、ピンク色の「関外総鎮守奉祝お三の宮大祭」と各町代表祭礼委員会の資料「各町祭礼委員様—お三の宮日枝神社」に掲載されており、取り違いのないように配慮されている。氏子区域全体を一日かけてじっくりと巡行し、またりレー方式で地区ごとに供奉者が交替するから、口頭伝承だけではスムーズに進まない。やはりある程度は文章と図表に表さなければならないのだろう。各地区の祭礼委員は自分の地区内の巡行が終われば、次の地区の祭礼委員にバトンタッチして行列からは離れる。例えば宮本地区祭礼委員は神社から千歳橋バス停前まで、寿東部地区祭礼委員は千歳橋バス停から山田町まで、埋地地区祭礼委員は山田町から大通り公園の石の広場まで、そして最後は伊勢佐木地区祭礼委員が伊勢佐木モール松坂屋前の奉安所まで付き従う。地区ごとに出てくる委員以外の神職、責任役員、地区の委員長、それに交替しない供奉者たちは一日中行列を組んで歩かなければならないから大変である。

日枝神社の大神輿巡行の特徴として注目したい点は、まず巫女さんや女性の参加者がほとんどいないことである。一般に巫女さんは神職と神輿＝ご神体に付き従うケースが多いけれども、筆者が参加した年度は巫女さんの姿は見かけなかった。その辺りの事情については別の機会に考えてみたい。次に、町神輿が行列から切り離されているために、非常に厳かに静かに巡行が進んでいくという点も注目しておきたい。日本のいろいろな祭りを見ていると、賑わしのために厳粛な行列に最初から、または途中から参加する神輿、だんじり、太鼓台、山車が結構

多い。あるいは神社神輿と町神輿が区別されていない場合には、神社神輿でも荒っぽい賑わしをすることもある。いずれの方式や形態が良いとか悪いとかは一概に言えない。それぞれの地域と神社には独自に育んできた祭り文化があるから、固有の事情を無視して画一的にすることは望ましくない。日枝神社の場合には、厳粛な大神輿巡行と翌日の町神輿の連合渡御とが全体の日程を支え合っており、それらの二つの神事と祭事が全体のバランスを取っているように思われる。

連合渡御に先立つ14日は大神輿巡行の間、各町内では多彩な行事が繰り広げられているが、14日が土日になるかどうかで様子が異なる。土日であれば午前中から神酒所に人が集まり縁日や催しがあるのに対し、平日の場合には午後3時以降に祭事の日程が集中するようである。筆者と調査補助者（ゼミの学生）の参加経験と町内の資料によれば、大体本祭りの中日（なかび）には子供神輿と山車は小さな子供や母親が午前中から引き回すところも少なくないけれども、大人神輿の町内巡行は3時以降になっている。特に大人たちが仕事から帰ってくる夕方から夜にかけて、神酒所周辺でのミニ縁日、山車の太鼓や笛、神輿の演舞などにより町内の祭り気分が盛り上がってくる。連合渡御の日は関心が外の舞台に向けられるから、町内での交流は14日の方が活発になるかもしれない。

●9月15日一町神輿の連合渡御と各町内のナオライー：お三の宮大祭のハイライトは、何と言っても本祭りの15日に行われる町神輿の連合渡御である。集合時刻は午前9時になっているけれども、神輿の数が多く神社周辺に広い空間が余らないために実際には出発の順番と時間を考えて、氏子区域の町から車などに神輿と担ぎ手を乗せてやってくる。平成5年度15日は天気が良く、かなり早くから神社の正面にある日枝小学校校庭に神輿と山車が集まってきた。9時30分近くになると日枝小と神社の間のそれほど広くない道路に出発順に並び始め、定刻が来ると神社の入り口に立つ神職のお祓いを受けながら渡御に出発していく（宮出し）。筆者は道路を挟んで神社の入り口の真向かいに陣取り、神輿が次々と出かけていく様子を一時間余り眺めていたが、それでもまだ残っている神輿があった。全ての神輿がお祓いを受け出御するのは、例年11時過ぎになるという。どの神輿も「そや」（と聞こえる）の独特のかけ声に合わせ、ゆっくりした歩調で進んで行くから、40基全てが通過するまでにはかなりの時間がかかる。平成7年度15日はあいにく天気が悪く、何基かの神輿が出発してから三十分ほどして雨が降り始め、すぐに土砂降りになってしまったために、中止にはしなかったがコースを短縮して渡御を行った。

連合渡御（昔の宮入りはなく今は宮出し）の見どころはいろいろとあるかもしれないが、専門的な調査研究の対象となるわけではないから見物客の各自の好みや関心にお任せしたい。ひと言指摘しておく、多種多様な、また多数の見物人がいて、それらの熱い視線や声援などがあってこそ、神輿の担ぎ手や山車の演技者たちも力が入るし楽しいパフォーマンスをしたくなる。見物人と担ぎ手＝演技者との相互作用によって祭りは盛り上がっていく。見物人が多数集まる場所に行くと担ぎ手の演技にもさらに力が入り、その場の雰囲気が高揚するようになる。そのような場所が連合渡御を見るスポットになるだろう。出発地点の日枝神社周辺、広い空間のある富士見川公園辺り、伊勢佐木商店街の長いモール、伊勢佐木町1・2丁目神酒所（神社大

神輿の奉安所), いくつかの商店街のブロックを区切る広い道路が交差する地点などにおいて, 見通しが良くて多数の神輿と見物人との相乗作用により渡御のハイライトシーンが生まれるように思われる。横浜でも昔からの商店街が集まっている伊勢佐木地区を主たる舞台とする点が, この祭りを盛り上げている理由の一つかもしれない。それはそうとして, 氏子地域の住民にとっては, 自分の家の前で多数の神輿と山車が通り過ぎてゆくのを眺めるのも楽しいのではなからうか。見る側にとっては自分の町の神輿や山車, 知り合いや縁者がいると余計に見物に力が入る。

朝9時30分に最初に神社を出発した神輿は, お三の宮商店街と伊勢佐木町商店街を適当に休憩を取りながら直進していく。そして伊勢佐木モールの先端にある吉田橋を左折して, 吉田町の神酒所辺りが最終地点になり, 最初の神輿は午後1時30分から2時頃には渡御が終わる。何らかのアクシデントによって途中で渡御を止めてしまう神輿や山車もあるというが, 4時までには大体連合渡御は終了する。渡御が終わると, 吉田町に近い町内はそのまま神輿や山車を巡行させながら神酒所に戻るのに対し, 寿東部と宮本地区の町内では車に神輿や山車を積んで神酒所まで戻るところが多い。連合渡御の間, 各町内の神酒所には委員が控えて留守番をしている。渡御に参加しない子供神輿と山車が残っている場合には, 適当に町内を引き回すこともあり, ミニ縁日を続けている神酒所もある。

連合渡御が終わると, それぞれの町内では夕方まで神輿の最後の町内巡行を行う。辺りが暗くなりかけた6時頃から, 本祭りを締めくくる直洗い(一般にはナオライは直会などの漢字を当てるが), 鉢洗いと呼ばれる儀式が行われる。お供えとして神酒所の祭壇に飾っていた樽酒を割り, 参加者が升について飲んでいく。町内ごとに飲み方に趣向が凝らされていて, 「いき飲み」「かけ声に合わせて飲む」「飲み比べ」などがあり, ナオライを盛り上げて祭りの締めとする。最後は委員の慰労会があり, 大体どこの町内でも夜9時頃までには本祭りの神事と祭事は終了するようである。

●本祭りの準備と後片づけ: これまでの記述は祭りの当日の内容であるが, 祭りにはそれ相應の準備と後片づけが必要である。神社の祭りは伝統的な行事であるから, 毎年同じようにやればよいとはいうが, お金や人員の確保, 祭具や神具の組立と設置には大変な労力を要する。本祭りの年は4月頃から神職, 責任役員, 地区委員長のレベルで話し合いが進められ, 基本的な方針が決定されるようである。年度によって進み具合に差が出てくるようであるが, 6月に入ると地区と町内ごとにほぼ委員や役割分担が決まり, 具体的な方針も煮詰まってくる。6月から7月にかけて氏子地域全体の祭礼委員会—全祭礼委員会と呼ばれ平成5年度は7月1日—が開催され, 集まった何百人もの委員に対してその年の連合渡御を中心とした日程と申し合わせ事項が周知される。その後, 各町内と地区がより具体的な詰めを行い, 8月に再度各町代表祭礼委員会—平成5年度は8月3日—が開かれ, 最終的な日程が確認される。全祭礼委員会と各町代表祭礼委員会は氏子地域全体のヨコの連携を確保するために必要な会議であるが, そこで具体的なことや細かいことを討議したり決めることは出来ない。そのような事柄は単位町内会と連合町内会のレベルで何回も話し合われて, 煮詰められていく。戦後は政教分離の原則に基づ

いて町内会は祭りから身を引いてしまうケースが多いけれども、お三の宮大祭については町内会が祭礼委員会を組織して運営している。大都市の都心の伝統的な祭礼を維持するには、そのようなしっかりした組織的な基盤が必要であり、もし町内会が祭礼から身を引いたら恐らくこの大祭の運営はうまくいかななくなるだろう。間に合わせの、臨時の任意団体で大祭を乗り切れることは出来ないだろう。ふだんから活動している組織が基盤にないとダメである。

現在の祭りの準備段階では祭典費と寄付金を集めることもさることながら、神輿の担ぎ手をいかにして確保するかも非常に重要な問題になる。都心の人口と年齢構成の変化の影響で、当氏子地域でも若い担ぎ手がなかなか集まらなくなっている。幸いにも横浜は関東の神輿文化圏の中心に入るため、神輿保存会のようなネットワーク型組織があり、そこから不足気味の担ぎ手を確保しているようである。ただ、余りにも「余所者や部外者」が増えると地域の祭礼の意味がなくなるので、気をつけなければならない。

さて、お金と人手の確保が出来れば、後は本番に向けて演舞と練りの練習をすることになる。各地に出来ている各種の保存会はふだんから練習をしているので、仮に地域で神輿担ぎの技能が伝承されにくくなっていても技能の指導に当たることが出来るだろう。祭りを支える文化と技能の問題に関しては、機会を改めて論述したいが、差し当たり当地域の文化的風土のようなものを指摘しておきたい。9月10日頃から祭具の組立と神酒所の設置をしなければならないが、組立と設置の技能がないとどうにもならない。日枝神社の氏子地域ほど職人文化に恵まれたところは少ないのではなかろうか。いくつかの神酒所で聞き取りをして気づいたことであるが、神輿を自分たちで製作したという話をしばしば耳にした。宮本地区と寿東部地区には大工を始め、建具、家具、畳等々の職人がかなりの数おり、横浜でも随一の職人のまちになっている。そういった職人の技能が祭具を自家生産して祭りを支えている。

以上のように華やかな祭りにはそれ相応の準備が必要であるが、祭りが終わった後も後片づけをして来年に向けての整理と用意をしておかなければならない。早いところではナオライと鉢洗いの後で直ぐに、その日のうちに神酒所と神輿などを片づけてしまうが、大体は9月16日の朝から後片づけをするようである。祭具は高価でデリケートなものであるから、きちんと整理して保管しなければ次の年には使えなくなる恐れがある。その点でも職人文化と気質が息づく当地では、製作技能の素人のサラリーマン地帯とは異なり無意識の行き届いた心遣いがされているように感じられる。

(2) 陰祭り (かげまつり・うら)

(1)では現在の本祭りの概要を述べたが、隔年で陰祭りと本祭りが交互に行われるので次に陰祭りを取り上げてみたい。隔年でしか祭りはしないということは良く聞かれるけれども、一年おきに祭りの形態が交替するのは珍しく、「おもて」「本祭り」と「うら」「陰祭り」という名称は詳しいことは分からないが、余り例がないかもしれない。そうなった歴史的経緯については別の機会に触れることにして、名称からも想像されるように「本祭り」「おもて」がメイン（主）で、「陰祭り」「うら」が副次的なもの（従）になるだろう。本祭りの半分くらいの日程が省かれる、特に祭りのハイライトの連合渡御がなくなるために、祭りの規模もかなり小さくなる。

ただ、祭りの核となる神社の神事と大神輿御巡行はきちんと実施されるし、本祭りの連合渡御の代わりに宮本地区の万灯（燈）神輿の行事と寿東部地区の連合渡御が行われる。本祭りの時は全体の日程がピンク色のパンフレット「関外総鎮守奉祝お三の宮大祭」にまとめられて配布されるけれども、陰祭りについては作成されていないが、近年の陰祭りの日程はおよそ次のようになっている。

- ・9月13日：夕方5時～6時に日枝神社での式典（本祭りと同じ）、神酒所を設置している町内（寿東部地区と伊勢佐木町1・2丁目）での御魂入れといろいろな行事

- ・9月14日：神酒所を設置している町内（寿東部地区と伊勢佐木1・2丁目と日枝町東部）でのいろいろな行事、宮本地区の万灯神輿の行事、日枝神社での縁日

*注意したいが、日枝町東部の神酒所は、本祭りとは異なり仮設のものである

- ・9月15日：日枝神社大神輿御巡行、寿東部地区の連合渡御

●9月13日一日枝神社神事と一部地域の神酒所の行事—：本祭りと陰祭りの基本的な違いは連合渡御がないことと、それに関連して神酒所と神輿を出さない町内が多いことである。日枝神社での式典は例年通り13日夕方5時から執行され、氏子地域全体の町内から代表が参列する。式典に代表を送るだけの町内は特に祭礼委員会を組織する必要はなく、神社とよその地区における催しを見物するだけになる。それに対し神酒所を設置し祭事を行う町内は本祭りの年と変わらず祭礼委員会を組織し、祭りが円滑に進むように配慮しなければならない。

筆者が参加観察した平成6年度と8年度のケースを基準に考えていくと、伊勢佐木地区は伊勢佐木町1・2丁目を除けば神酒所は設置しない。なぜ1・2丁目だけが例外なのかという疑問はあるが、たまたまその神酒所が神社の大神輿が奉安される場所で御巡行の到達地点でもあるためかもしれない。御巡行という神事の最も重要な地点になるために、伊勢佐木町1・2丁目は神酒所を開き例年通り祭事を行い、神社大神輿をお迎えする心意—自負心とも言える—が根づいているのだろう。宮本地区でも日枝町東部を除けば神酒所は開設しないし、町神輿と山車等を出さないから、本祭りの時のような町内行事は特に行わない。日枝町東部の神酒所も文字通り本来のものでなく仮設のものであり、町が誇る大人神輿は飾っていない。

その反対に、寿東部地区では一部の町内—平成8年度は浦舟町西部と白妙町第二—を除けば本祭りの年と変わらない神酒所を開設し、多彩な催しを実施する。関係者の話では浦舟町西部は祭祀空間の地理的な事情（難点になる）もあり、神酒所と神輿を出さないとのことであり、また白妙町第二はたまたま町内会館の移転と改築の年に当たったために町内の祭事を中止したようである。神酒所を開設した町は13日の夜7時頃から順次御魂入れの儀式を執行し、肩入れ＝神輿の町内巡行をする。これは本祭りの時と同じである。

●9月14日—神酒所での祭事と宮本地区の万灯神輿の行事—：本祭りの年は14日に神社大神輿御巡行があるが、陰祭りの年はそれが15日に行われるために14日の昼間は神酒所のある町の祭事だけになる。埋地地区を含め氏子区域全体で四十前後の町があり、それらのうち寿東部地区の八ヶ町内、伊勢佐木町1・2丁目、日枝町東部が祭事をするに留まるから、祭りのムードは一部の地域だけに偏ってしまう。ただ、お三の宮大祭の本祭りはかなりスケールが大きいので、

陰祭りの規模だけでもよその普通の祭りには匹敵する。寿東部地区では8基の大人神輿が出るから、日本全国の普通の基準からすれば決して見劣りするわけではない。個々の町内の催しや祭事に関しては、同じ報告書の資料と町ごとのレポートを参照していただきたい。

陰祭りの中で最も注目したい行事は14日の夜の万灯神輿の巡行（渡行）である。宮本地区（お三の宮）ハケ町氏子青年会が主催する行事で、富士見川公園—伊勢佐木地区と宮本地区との境目にある一に面する森川金属倉庫の前から日枝神社まで神輿を担いでいく。午後6時過ぎ頃から出発地点に準備のために参加者が集まってくる。万灯神輿の由来などについては機会を改めて検討してみたいが、氏子青年会長の鈴木享昌さんによれば古くからあった行事ではなく、「本祭り＝おもてと陰祭り＝うら」という交互の形式が定着した戦後になって生まれた賑わしと奉納の祭事であるという。今の万灯神輿は十数年前に千葉方面から手に入れたそうであり、形といい大きさといいなかなか立派なもので風情もある。6時30分頃から神輿の前に仮設の祭壇を作り、関係者が参列すると角井宮司が出御の儀式を執り行う。あいにく平成6年と8年は小雨が降り、星空の下で出御と渡行をすることはできなかった。

夜7時過ぎからゆっくりとした歩調で万灯神輿を担いで、お三の宮商店街を通り日枝神社に向かう。多少天気は悪くても夜の暗さに照らし出された万灯神輿は風情があり、渡行の道中は見物に出る地元の住民も多い。一時間余りかけて日枝神社に到着するが、その間神社では境内一杯に夜店が並び、本殿の隣にある舞台では劇や踊りが披露されている。神酒所を開設しない宮本地区の町内にとっては、近くにある日枝神社に行けば夜祭りを楽しむことができる。

●9月15日—大神輿御巡行と寿東部地区の連合渡御—：陰祭りの年は15日に大神輿の御巡行がある。やり方は本祭りの時と変わらない。神職、連合の委員長、神社の責任役員、行列に付き従う氏子青年会メンバーを除くと、リレー方式で地区ごとに供奉者が入れ替わりながら、氏子地域全体を文字通り紆余曲折して神幸していく。本祭りの連合渡御は神社からお三の宮と伊勢佐木の商店街を直進するのに対して、商店街の裏通りもくまなく回るから時間がかかる。神様のご神体を氏子全域にお旅させて、氏子と町の幸せと繁栄を祈願する。

大神輿の御巡行と併行して、神酒所のある町では町神輿と山車の巡行、ミニ縁日などが続けられる。万灯神輿と並んで陰祭りを盛り上げるのは、午後1時頃からスタートする寿東部地区の連合渡御である。12時30分頃から横浜橋商店街に続く三吉橋商店街に先端に架かる橋の辺りに神輿が集まり、賑わしをしながら午後1時前後には順次渡御を始める。伊勢佐木商店街と双壁をなす横浜橋商店街を地区の神輿と山車が巡行する。伊勢佐木とはお店の種類や構成が異なり食べ物と日用品を扱うお店が多く道幅も狭いとはいえ、伊勢佐木町1・2丁目に劣らないくらい人出の多い、活気のある商店街である。寿東部地区の連合渡御には最もふさわしい場所に違いはない。この商店街を巡行した神輿と山車はそれぞれの町内に戻っていく。話は多少逸れるが、横浜橋商店街の東側には大鷲・金刀比羅神社があり、11月の取りの市にはかなりの人出があるという。宗教的な場とか行事には繁華街や人出が付きものかもしれない。

地区だけの連合渡御が終わると、寿東部の町内では本祭りの連合渡御の日とほぼ同じ日程で行事を行う。そしてナオライ、鉢洗いなどをフィナーレとして全ての祭事は終了する。

●準備と後片づけ：(1)のところで大筋は書いたので、本祭りとの違い、特に準備の問題だけを取り上げておく。陰祭りの年は神酒所と神輿等々を出さない町が7割を占めるために、当然全祭礼委員会のような大がかりな会議はしない。寿東部地区だけは単位町内会と連合町内会のレベルで祭礼委員会を組織して、準備を進めていく。各町の行事と日程については単位町内会レベルの委員会が細かいことまで決め、地区の連合渡御については連合町内会レベルで代表委員が会議をして調整していく。どのレベルでもふだんから会合をしているメンバーが祭礼委員会を組織するから、余りとまどうこともなく会議とか準備は進むのではなかろうか。氏子区域全体の代表祭礼委員会は本祭りの時と同じく8月の初め頃開催され、陰祭りの日程を最終的に確認する。

以上、今の日枝神社例大祭の姿を素描してみたが、現代という時代はいろいろな面で変動が激しいから祭礼も同じ形態と内容のままでも何十年も続くかどうかは予想できない。本祭り一陰祭りの隔年形式へ、町神輿の宮入りから宮出しへ、多様なイベントの追加削除など、戦後になって祭礼の形態は少しずつ変容している。学術研究の分野では追跡調査という形で十年後、二十年後の姿を再検討することがしばしば行われる。できれば何年間かの期間を空けて日枝神社例大祭の持続と変容の追跡調査を試みたい。

3 お三の宮大祭の文化的再生産—祭礼の社会文化的基礎—

これまでは現地調査に基づいて氏子地域と例大祭の概要をまとめてみたが、次にブルデューの文化的再生産論と都市社会学の下位文化理論を参照しながら、例大祭が持続している社会文化的背景について再考してみたい。なお、文化的再生産論と下位文化理論に関する理論面の考察は別の機会に発表したもので、ここでは事例に対する応用という面を中心に論述するつもりである。

(1) 日枝神社例大祭の歴史的経過—大ざっぱな推測—

江戸時代初期（1650年代から60年代）に吉田勘兵衛が新田を開発した際に、鎮守の神様として江戸の赤坂山王社の分霊を勧請して日枝神社が創祀されたという。そうは言っても、冒頭で述べたとおり明治以前は寒村に過ぎなかったから、規模の大きい祭礼が行われていたとは考えられない。大きな祭りにはそれ相応の人員、組織力、お金、祭具、多様な仕掛けが必要であり、人口の量と密度、並びに経済的文化的な資源がある程度の段階に達しないと盛大な祭礼は生まれにくい。日本を代表するような、第三ランクの50万都市になった明治末から大正時代にかけて、現在に近い規模と形態の祭りになったものと推測される。祭礼に関する歴史資料が乏しいから、現在の神輿の製作年代や言い伝え等を手がかりに推測していくこともやむを得ない。

『伊勢ぶら百年』（昭和46年）等の資料に掲載されている伊勢佐木町1・2丁目の「火伏の神輿」の言説によれば、大正時代になると氏子区域の中で経済力のある町は競って豪華な神輿を新調しようとしたらしい。伊勢佐木商店街の繁栄をバックにして1・2丁目も大正天皇即位記念事業のために神輿の新調を企画し、10年に着手して12年には完成することになっていた。完

成間近の12年9月1日に関東大震災が起り、神輿もダメかと危ぶまれたけれども、幸いにも何事もなくほぼ予定通り12年に納品されたという。その神輿が現在も大切に保管されているが、実に立派なもので当時の祭りの姿を伝えている。また神社と祭りの資料、並びに聞き取りによれば、現在の神社の大神輿は昭和9年に製作され奉納されたが、前の神輿は日枝町西部に譲り渡され最大の町神輿として今も大切に使用され続けている。その他山王町や万世町などの町神輿も昭和の初め頃に作られたと言われており、戦後に新調されたものを除けば現在の町神輿の大半は大正時代から昭和初期にかけてほぼ揃っていたものと推測できる。

祭りの規模と形態に関しては、数少ない戦前の新聞記事、神社関係の資料、横浜市関係の歴史資料などを参考にすると町神輿の数は戦前の最盛期（昭和10年前後）の方が多かったようで、昭和10年9月15日の『横浜貿易新報』によれば連合渡御の時には百三十基の神輿と山車が出て大変な人出があったという。『伊勢ぶら百年』に所収の「昭和14年飯沼飛行士帰国パレード」の写真をみると、伊勢佐木町1丁目の通りは人で埋め尽くされていて身動きも取れない。人口を調べてみても、昭和12年の時点で日枝神社氏子区域の人口は現在よりも随分と多く、特に伊勢佐木地区は三倍くらいの人口であり、祭りの人出もかなりあったものと想像される。埋地地区は戦前は他の氏子地区と類似した住商工混在の街であり、神輿と山車を出していたそうである。それが戦災で焼け野原になり戦後は進駐軍に一時接收され、さらに接收解除後は職業幹旋機関等ができたこともあって昔の住民がほとんど入れ替わり、一部ドヤ街のような街に変わってしまった。今では神酒所、神輿、山車を出す町内はない。人口だけで祭りの規模と賑わいが決まるわけではないとは言え、二倍も三倍も違うとやはりエネルギーの総計も変わるから、「人口が最大であった昭和初期が祭礼も最大であった」という仮説も成り立つかもしれない。もちろん今でもお三の宮大祭は盛大であり、決して衰退しているわけではない。その点だけは特記しておきたい。

祭りの形態については、「関外総鎮守奉祝お三の宮大祭」などにも書かれているように戦前は本祭りと陰祭りの隔年交替形式ではなく、毎年三日間今の本祭りのような形で賑やかな祭事を繰り広げていたという。戦後になって昭和50年頃から世の中の流れに合わせて隔年形式に変えた、ないしは変えざるを得なくなってしまった。世俗化、私化（しか・わたくしか）、教育と職業の重視、娯楽の多様化などの流れに逆らえず、当地の祭礼に限らず伝統的な儀礼全般が短縮と簡素化を余儀なくされている。ただ、祭礼のエネルギーを保持したり高めるためには他の娯楽とイベントなどを組み込む必要があり、省略された伝統的な要素の代わりに新しいものが付加されて昔よりも膨らんでいるケースもある。ここでは紙幅の都合上詳しい具体的なことを書けないけれども、お三の宮大祭にも以前はなかった催しや仕掛け—例えば女性や子供が参加する神輿や山車のコンテスト行事など—が入っているように感じられる。

さて、祭りの運営の方式に関してはどのような変遷があるのだろうか。現在は町内会が基盤になって祭礼委員会を組織し大体祭礼に関わる事を取り仕切っている。町内会—祭礼委員会の運営方式については後で詳しく述べてみたい。町内会—祭礼委員会方式はいつ頃確立されたのだろうか。戦前のことは今後さらに調査を続けてみないと、はっきりしたことは言えない。差

し当たり戦後のことだけ考えれば、横浜市の町内会ないしは自治会は横浜市の強力な行政指導の効果のためか全国でもかなり早い時期に組織化が進み、しかもきちんとした形で住民を加入させ地域の諸事全般について対処するようになった。そのような経緯で日枝神社の氏子地域の町内会も諸事全般に関わることになり、祭礼についても憲法の政教分離の原則に抵触しない形で町内会が祭礼委員会を組織し取り仕切ることになったようである。もちろん、大方の言説では町内会と言えば日本固有の地域住民組織であり、昔から当然存在していたということになっている。法制化されたのは昭和10年代になってからであるが、慣例上は大正時代にはほぼ組織形態が確立している。横浜でも大都市になった明治末頃から町内会のような地域組織が形成され、次第に地域の諸事全般に関わるようになっていったかもしれない。そう考えれば戦前から、現在のような「町内会—祭礼委員会」に近い方式で祭りは運営されていたものと推測できる。ただ、戦前は町内会とは異なる固有の祭祀組織—宮座や頭屋制などが活躍しているケースがあったから、日枝神社の地域にも固有の祭祀組織がかつては存在していたかもしれない。その問題は今後の研究課題にしたい。

(2) 町内会と祭礼委員会による祭礼の運営

お三の宮大祭ほど大きな祭りになると、かなりしっかりした組織を作らないと必要な資源を調達して日程を決め、さらに日程通り祭礼を進行させることは難しい。先ほど述べたように、近世から第二次大戦まで日本の農村部と古くからの都市では宮座や頭屋制と呼ばれる祭祀組織が神社の神事と祭事を営んでいたけれども、戦後は祭祀組織もかなり多様化している。宮座や頭屋制が崩壊しなければ、祭礼も規模と形態が多少変わろうが持続するだろう。もし伝統的な祭祀組織が壊れたとしても、商工会、自治会、地域の組合、職業関係の組合、任意の住民組織などの新しい団体が代わりに祭祀組織になれば、祭りを続けることができるだろう。江戸時代末に横浜は開港場に指定されてから急速に都市化したために、近世との社会的文化的連続性はほとんどない。明治以後に近代的な大都市に発展したから、宮座とか頭屋といった近世型の祭祀組織は成立しなかったか、もしくは崩壊してしまったものと思われる。戦前の祭祀組織に関してはもう少し調査を続けてから別の機会に考察したいが、日枝神社の氏子地域が明治時代後半に大都市になってからは、概ね「商業と工業を中心とする町」としての地域特性は余り変化していないことを考慮すれば、商工会関係の団体もしくは町内会のような住民組織が祭祀組織の基盤となっていたのではなかろうか。いずれが基盤となっていたとしても、戦後の町内会—祭礼委員会方式との連続性は維持されていると言えよう。

さて、戦後の祭礼を運営してきた町内会と祭礼委員会の方式の特徴を取り上げてみよう。まず問題となるのは町内会と神社組織との関係である。神社組織は戦後は国家神道体制から神社本庁体制へと編成換えしたために、「任意の宗教法人」になっている。内実はともかく、形式上はそれぞれの地域社会と神社との関係の中で任意に法人化すればよい。日枝神社（お三の宮）の場合にも宮司、責任役員、氏子の代表と世話人が中心になって神社を切り盛りしている。形式上は町内会とは全く別の組織になっているから、政教分離の原則に抵触することはない。ただ、氏子の組織を作る際に、地域区分、代表や世話人の選出、タテとヨコの編成の仕方などの

面に関してどうしても町内会組織に関わらざるを得ない。したがって、どちらかが先ということにはならないけれども、町内会組織に基づいて神社の氏子組織が作られるような形になる。ちなみに今の町内会の体制は次の通りになっている。南区と中区という区レベルに区連合町内会があり、その下に地区レベルの地区連合町内会がある。地区レベルの下には単位町内会、さらに班と組がある。日枝神社の氏子区域に入る連合町内会は南区お三の宮地区連合町内会、南区寿東部地区連合町内会、中区第一地区中部連合町内会、中区埋地区連合町内会の四つである。氏子組織と祭祀組織の場合には、お三の宮地区が宮本地区、第一中部連合が伊勢佐木地区と名称が変わる以外はほとんどそのまま町内会組織を振り替えている。

次に、お三の宮大祭の祭祀組織と運営の仕方をもう少し具体的に考えてみよう。筆者は学生たちに協力してもらいながら平成5年度から8年度までに、ひと通りほとんどの町内を回って見たが、どこも例外なく祭礼の組織と町内会とが対応していた。すなわち、連合一単位というレベルの対応、町内会会長等の役員と祭礼委員会の委員との役割分担の対応が見事なまでに一貫していた。もちろん、住民自治の分野と祭礼の分野は異なるから、役職や活動に関する名称はそれぞれ別になっている。地区連合と町単位の町内会会長は地区と町の祭礼の組織では委員長になり、町内会副会長は祭礼の場合には副委員長になる。例えば伊勢佐木（第一地区中部連合）地区は肥沼俊三さんが連合会長であり地区委員長であり、同様に寿東部地区は大垣立男さん、宮本（お三の宮）地区は山橋与作さん（後に大津幸雄さん）、埋地地区は大久保武さんが連合会長であり地区委員長である。単位町内レベルでも大垣立男さんは白妙町第一町内会会長であると同時に、その祭礼委員会の委員長になる。単位町内レベルでは会計などの完全に対応する役割はそのままスライドし、それ以外はほぼ活動や位置づけを基準に役割を対応させて祭礼委員を決めている。町内ごとの具体的な事例は別のところに掲載したので、参照して頂きたい。ただ、注意しておきたい点は、町内会の分野では地区連合の役割分担組織があるのに対して、祭礼の分野では地区委員長以外は地区レベルの明確な役割分担組織は作られていない。個々の単位町内の祭礼委員会が祭礼に関する活動や役割を遂行すれば、それでほとんどのことが間に合う。地区間と町内間のヨコの連絡と調整は連合町内会、代表祭礼委員会、地区委員長の会合などを通じて随時検討すれば事足りるようである。

町内会組織を基盤とする祭祀組織はいろいろな面で便利である、あるいは効率がよい。仮に別のやり方で祭祀組織を作ろうとしたらどうなるか。例えば商工会や商店街の組合を基盤にした場合はどうか。組合員の資格は特定の職業に限定され、異なる職業や無職の者は参加できないから、できるだけ多くの地域住民を参加させる点で問題が残る。商店街の組合が祭祀組織を作る場合には町内会ないしは自治会、婦人会、子供会、老人会などの他の団体と連携しなければならないだろう。神戸の生田神社の祭礼（生田祭）では輪番制になっているが、当番になった地域ではしばしば商店街の組合が中心になって祭礼委員会を組織することもある。ただし、生田祭は十年ワンサイクルの輪番制なので、当番になった地区は十年に一回だけ祭礼委員会を作ればよいから、その年だけ商店街が全力で住民や商業者を総動員する気持ちになるかもしれない。もし毎年のことになると、もっと効率のよい別のやり方を工夫しなければならないだろ

う。職業、年齢、性別に関係なく多くの住民を動員できるのはやはり町内会ないしは自治会である。戦後は任意加入になっているとはいえ、大都市でもほとんどの住民（世帯）が会員になっていると同時にふだんからいろいろな活動をしているので、地域関連の団体の中では動員力や組織力の点で申し分ない。日枝神社の氏子地域では特に町内会がしっかりと組織され、日常の活動も盛んである。婦人と青少年を担当する部や係も設けられているので、職業を持つ大人の男性だけに限定されてしまうこともない。

お三の宮大祭の各町内の資料を見ていると、ふだんの町内会の役割分担と活動が地域に根づいていて、祭礼の期間にはそれらが無理なく祭礼委員会の役割分担と活動に切り替えられている様子がよく分かる。戦後も大祭が途切れることもなく、毎年盛大に実施されている組織的背景として町内会を高く評価すべきだろう。

(3) お三の宮大祭の文化的背景—商工業者の技能と気質—

祭祀組織がしっかりしていることは確かに重要な条件であるけれども、それだけでは大きな祭りは持続しない。祭りには文化的側面があるから、しかるべき文化的な要素を生み出し発展させていく土壌が必要である。お三の宮大祭を観察してみると、神輿、山車、太鼓、およびそれらの祭具に関係する演技やお囃子が祭りを支えていると同時に盛り上げている。また、職人と商店の街という地域特性も重要な文化的基盤となる。

まず祭具について考えると、神輿の数がわずかであれば複数の町が費用を出し合って、どこか遠くの専門業者に頼んで製作してもらえばよい。ここの祭りでは町ごとに神輿を出して総計四十基前後にもなる—かつては百基を越えていたという—から、何でもかんでも外注して済ますわけにはいかない。費用の問題ばかりでなく町の面子（メンツ）の問題にもなる。もし神輿を祭りのシンボルとか誇りとするならば、自家生産するくらいの心意気がなければならない。寿東部地区と宮本地区のいくつかの町内で聞き取りをして気がついたことであるが、「以前自分で神輿を作ったことがある」「既に亡くなってしまった町内の人が昔ここの神輿を作った」「昔この町に住んでいた人がここの神輿を作った」と言った話を耳にすることが多い。今では宮大工や神輿を専門に製作する業者は当地にはほとんどいなくなってしまったけれども、大工、建具、家具、表具などの職人の場合にはある程度までは神輿を自分で製作することも可能である。全ての部分や部品を自家製造することはできなくとも、基本的な骨組みを作ることはできるはずである。寿東部から宮本地区には大工、建具、家具、表具などの職人がかなりいるから、聞き取りで得られた「神輿を作った」話は本当のことであろう。戦前は百基を越す神輿が繰り出したと伝えられているが、職業別人口を調べてみると横浜の中では当地域に、高い技能を持つ職人が集中していたから、恐らく大半の神輿は町内で自家生産されていたものと推測される。

文化的再生産論の専門用語を使うと多少理屈っぽくなるが、祭りにはそれ相応の文化資本（ピーエル・ブルデュエの用語）が欠かせない。神輿などの祭具を生産する文化資本が町の中に存在している、さらに伝承されている場合には、神輿をシンボルとする祭礼は存続できる。家具や家を作る職人ならば、神輿を作ることも可能である。職人の技能という形で身体化された

文化資本は、神輿という客体化された文化資本を生み出し、そこから弁証法的に文化資本は発展していくかもしれない。より豪華な、あるいは質の高い神輿が製作されるようになるかもしれない。戦後は当地でも職人の数が減少してきているために、身体化された文化資本の伝承は容易でなくなっている。家を作るにも最近では機械により部品を仕上げ、それらを組み立てるやり方が増えてきて、手先と身体の巧みな職人技が必要ではなくなりつつあるように聞いている。そうなると祭具を製作できる職人も育たなくなってしまう。神輿の自家生産が全くできなくなると、神輿をシンボルとする祭礼の存続は危うくなるだろう。

次に祭具を使用する演技について再検討すると、自分で工夫して製作した道具ならば使いこなすことも比較的容易である（他人が作った道具を使うケースに比べた時の使いやすさとか使い心地を基準にすれば）。作ることと使うこととの間には、身体技法と心持ちの面で何かしらつながりがあると考えれば、神輿を製作できる職人たちは神輿を効果的に使いこなす技にも優れているかもしれない。祭具を作る技法と心意が祭具を使う技法と心意を発達させ、さらに後者が前者を発達させるようになるだろう。製作の技能と演技の技能との間に好循環が生まれ、祭りの文化は演技の面でも華やかなものになるだろう。明治末から昭和初期までの日枝神社例大祭の発展には、そのような好循環が背景にあったものと想像できる。近年の神輿の担ぎ手は神輿保存会のメンバーが増えて、より洗練されているという話も聞いているし、世の中総じてパフォーマンス（演技）に長じてきているので、製作技能の衰えをいろいろな形でカバーしながら祭りの演技を保持しようとしている。作る文化と演じる文化が分離しているのが現代であるが、余りにも分離しすぎると祭りの文化は解体する恐れがあるから気をつけた方がよいだろう。

さて、当地には商業従事者もかなり多い。彼らの経済力と、ものを見たり楽しんだりする目とが職人の技能とともに祭りを支えているように思われる。『図説・横浜の歴史』（平成元年）『横浜・中区史』（昭和60年）『南区制50周年記念誌南・ひと・街・ところ』（平成6年）などの歴史資料によれば、開港場横浜において関内は外国人居留地と貿易商人の街として発展したのに対し、関外の日枝神社氏子区域は関内の後背地であり中小の商工自営業者と労働者の街として独自の道を歩んできた。明治末から大正時代には過密な人口を抱えるようになり貧困と犯罪などの都市問題が現れたけれども、他方では繁華な商店街が形成され演劇、映画、様々な催しが行われ、人々を楽しませる都市文化も花開いた。そのような商店街の発展によって豊かな経済資本が蓄積され高価な祭具を注文＝購入できるようになり、町の力のシンボルともいうべき華麗な神輿が製作された。例えば、既述のように伊勢佐木町1・2丁目では、高村光雲を始めとする優れた芸術家に依頼して芸術的価値の高い神輿（火伏の神輿と呼ばれている）を作った。一般に経済力が大きくなるにつれて祭りの道具と仕掛けも豪華になるから、祭礼自体も華やかで盛大なものになる。また、商業従事者の独自の目、すなわちお客さんの好みに合う良いものを選んで商いをするという実践感覚（センス）も華麗な祭り文化を生み出し支えていく。

商業者の経済力と嗜好＝実践感覚とは別に、繁華な商店街の持つ空間的仕掛けも祭り文化には欠かせない。氏子区域には伊勢佐木商店街の他にも、横浜橋、お三の宮、若葉町、福富町、

曙町の商店街があり、至るところ商店街という感じがする。日頃から多くの人が集まり往来している商店街は、珍しい見せ物を出すには格好の場所である。神輿、山車、太鼓を出して演技をすれば、集まった人々は祭り見物を楽しむことができる。恐らく祭具が華麗なものに変容するのは、商店街のような空間的な仕掛けがあるためである。繁華な空間において見物人と演技者との相乗効果を通じて、祭具と演技は華麗なる変身を遂げるようになるのかもしれない。

(4) 日枝神社例大祭の社会文化的特徴—都市の下位文化と社会の階層文化の問題—

(1)から(3)において祭礼の文化的再生産という視点から、日枝神社例大祭を育み支えてきた組織的基盤、文化的土壌、空間的特性などに関して再検討してみた。再生産論に対しては変動論的視点が弱いとか、くり返しの発想が強い等の批判があるけれども、ここではくり返されながらも少しずつ変容してきたことを忘れずに書いてきたつもりである。理論や方法論の問題を正面から取り上げる場ではないので、これ以上再生産論の論議をすることは差し控えたい。ただ、最後に少しだけ下位文化（subculture）と階層文化の視点から日枝神社例大祭の特徴を考えてみたい。

文化的再生産論と都市社会学を交差させてみると、都市における下位文化がどの階層と地域を基盤に形成され維持されたり、あるいは変容していくのかが問題として浮かび上がってくる。最近の都市社会学では、正常—病理などの価値判断を控えめにして都市空間における多様な文化の生成発展を研究するようになってきている。クロード・フィッシャーの非通念性、臨界量、下位文化がキーワードとなるが、異質な要素が絶えず流入し混合する過程で既成の文化とは異なる文化が次々と生まれては変容していく。映画、芝居、寄席、ジャズ、クラシック、いろいろな催し、キリスト教、仏教等々、数え上げれば切りがない。例えば横浜が誇る下位文化の一つであるジャズ文化に関して言えば、ジャズ演奏を出来るバンドや施設が存在し、さらにそれを聞いたり楽しんだりする人々などがいて始めてジャズ文化は存続が可能になるだろう。演奏者や演技者、施設と資金、鑑賞者や観客がある程度の量、持続的に存在するようになった場合にそれぞれの下位文化は生成—再生産される。そして、ジャズ文化という特定の下位文化のレベルが向上するためには、競合するバンドが次々と現れ、またいろいろなバンドが演奏される施設が増え、そこに鑑賞に行く人々の数と音楽的能力がともに増大することが条件となるだろう。大都市は多様な下位文化が生成—再生産され、さらに向上するための条件（非通念性と臨界量）が揃っている。

神社の祭礼も大都市においては数ある文化の中の一つに過ぎないと言えよう。既にくり返し指摘したとおり、日枝神社の氏子区域は開港場を支える中小の商工自営業者と労働者の町として発展してきたので、祭りにも住民の特性が色濃く反映されている。会社と役所に勤めるサラリーマンが住む団地やニュータウンであれば、お三の宮大祭のような祭礼が生まれる可能性は低い。ある特定の文化は、その文化と適合性ないしは親和性の高い職業階層が存在しなければ育たない、言い換えれば文化の担い手とか育成者が存在するかどうかが非常に重要なポイントになる。開港場を支える多様な職人が大量に存在し、西洋からの技能と技術の刺激もかなりあったために質的な向上が可能となり、そこから生まれた質の良い技能と技芸が祭り文化の基礎

となった。また、開港場を商いの場とする商業者の経済力と商業空間が祭り文化の技能と技芸を現実的なものに転換した。文化資本と経済資本と社会関係資本とが融合して独自の祭りが生まれた。

横浜には西洋からいち早くいろいろな文化が流入し、洒落たモダンな施設、建物、制度、衣食住の風俗が街の中に出現した。例えばキリスト教の学校や教会も山手地区に作られ、そこは西洋的な雰囲気を持つ街になっていった。また、居留地と関内の日本人街には洋風のモダンな建物がたくさん造られ、昔の城下町とは異なる都市が出来上がった。それらの明らかに洋風の街と比べると、日枝神社の氏子区域では日本の伝統的な要素と外来の要素とがミックスされ、近代日本における独自の「和風の文化」が開いたように思われる。それは、近世までの村の土俗的な文化とはひと味違う、逆に純粋に洋風な文化とも異質な「近代日本の都市の民衆文化」と言うべきものかもしれない。もちろん、江戸の神田祭、山王祭、浅草三社祭などの近世都市の祭り文化を継承している面もある。神社（宮）神輿、町神輿、山車、お囃子、舞い、町内会運営方式（宮座の欠如）、神輿保存会、独特の気質や実践感覚などの面で京浜地方から関東周辺にかけてはある種の共通性が感じられ、関西や中京、東北や九州や四国とは異なる要素も少なくない。横浜のお三の宮大祭に関しては、東京だけでなく川崎を含む関東の都市の祭り文化という視点からの比較研究も必要である。祭具といった有形の対象は調べやすいのに対して、演技や運営方式に表れる実践感覚は現地の祭礼に参加して共に活動していかないと把握できない。文献資料だけでは研究不可能な扱いにくい対象であるけれども、今後の研究課題の一つにしたい。

いずれにしても祭具、演技、運営方式、実践感覚などの面において固有の価値を備えているから、これからも大切に伝承してもらいたい。現代の大都市では、次から次へと短いサイクルで新しいものが流行しては消えていくが、明治時代から約百年もの間存続しているお三の宮の祭り文化は「未来都市横浜」の中でも消えないように切に願っている。終わりに、平成5年度から8年度まで（断続的ではあるが）の現地調査に際して、地元の多数の住民と公共機関の方々にご協力を頂きましたことを記し、厚く御礼を申し上げます。

[本稿は平成8年度文部省科学研究費補助金による研究成果であり、別の機会に多種多様な祭礼資料を掲載した中間報告書を作成した。また、文化的再生産論と下位文化理論に関する再考は、1997年度内に刊行予定の中久郎編『社会学論集—持続と変容』に発表した。なお、本稿は中間報告の第I部の論稿を加筆修正したものである。]

参考資料と参考文献

(氏子地域や日枝神社などの郷土資料の詳細に関しては、文部省科学研究費補助金による中間報告書で取り上げたので、そちらを参照していただきたい。)

- ・平成5年度から8年度までの現地調査で集めた各種の祭礼の資料：日枝神社関係、お三の宮大祭の全体の日程に関する資料、各町内の祭礼に関するチラシやパンフレット、祭礼に関する写真集
- ・平成5年度から8年度までの現地調査で集めた町内会の資料

- ・「図説・横浜の歴史」編集委員会『図説横浜の歴史』（横浜市市民局市民情報室広報センター，平成元年）
- ・横浜市市民局市民活動部広報課広報センター編『横浜思い出のアルバム』（横浜市制90周年・開港120周年記念行事実行委員会，昭和54年）
- ・中区制五十周年記念事業実行委員会編『横浜・中区史』（中区制五十周年記念事業実行委員会，昭和六十年）
- ・南区制50周年記念誌編集委員会編『南・ひと・街・ころ』（南区制50周年記念誌刊行委員会，平成6年）
- ・「中区わが街」刊行委員会編『中区わが街—中区地区沿革外史』（横浜市中区役所，昭和61年）
- ・南区の歴史発刊実行委員会編『南区の歴史』（南区の歴史発刊実行委員会，昭和51年）
- ・伊勢佐木町一・二丁目商和会伊勢ぶら百年編集委員会編『伊勢ぶら百年』（伊勢佐木町一・二丁目商和会，昭和46年）
- ・『協同組合創立35周年記念誌あゆみ』（協同組合伊勢佐木町商店街，1985年）
- ・『横浜市史稿』（第1～11巻）（横浜市，昭和6～8年）
- ・『横浜市町別人口統計』（横浜市総務局事務管理部統計課）：昭和初期から現在までの国勢調査結果報告書または統計書
- ・『横浜市の事業所（平成3年度事業所統計調査結果報告）』（横浜市総務局事務管理部統計課，平成5年）
- ・『住民組織の現状と活動（平成7年度自治会町内会実態調査報告書）』（横浜市市民局地域振興部地域振興課，平成8年）：自治会町内会実態調査は昭和30年から始まっているので，横浜市役所の市民情報センターと中央図書館で昭和30年代から適宜その他の年度についても調べてみた。
- ・山田操『現代日本の地域社会—京浜地帯と地域運動—』（世界書院，昭和42年）
- ・『横浜市の商業（平成6年商業統計調査結果報告書）』（横浜市企画局政策部統計解析課，平成7年）
- ・横浜市商工会議所と商店街連合会の各種の統計とパンフレット
- ・『商店街実態調査報告書』（神奈川県商店街連合会，平成8年）
- ・『商業活性化研究会事業報告書—県内商店街活性化への提言—』（神奈川県商店街連合会，平成8年）
- ・『関外総鎮守お三の宮日枝神社略誌』（日枝神社社務所）
- ・早川茂男『お三の宮とおさんの伝説』（自費出版，平成五年十一月）
- ・『平成三年度お三の宮祭 OUR HOME TOWN YOKOHAMA』（企画《有》アングル）
- ・「関外総鎮守奉祝お三の宮大祭」：平成三，五，七年のパンフレット
- ・神奈川県神社辞典と神社誌に関する資料
- ・相原純『神奈川のまつり』（万葉堂，昭和47年）
- ・永田衡吉『かながわの祭と芸能』（神奈川合同出版，昭和52年）
- ・高橋秀雄他編『祭礼行事・神奈川』（桜風社，平成3年）
- ・『神奈川県宗教法人名簿』（神奈川県民部私学宗教課，平成8年）
- ・伊倉退蔵他編『神奈川県地名大辞典』（角川書店，平成3年）
- ・田村明『都市ヨコハマをつくる』（中公新書，昭和58年）
- ・河村十寸穂他『都市と市民参加』（有隣堂，昭和59年）
- ・『横浜のたより』（横浜国際観光協会）：月刊誌で，横浜の催し，イベント，祭りなどの案内が掲載されている。図表などもあり，なかなか重宝な冊子である。
- ・ピエール・ブルデュール『実践感覚1』（今村仁司訳，みすず書房，1988年）
- ・同上『ディスタクシオンⅠ・Ⅱ』（石井洋二郎訳，藤原書店，1990年）
- ・同上『構造と実践』（石崎晴巳訳，藤原書店，1991年）
- ・宮島喬編『文化の社会学—実践と再生産のメカニズム—』（有信堂，1995年）
- ・宮島喬『文化的再生産の社会学—ブルデュール理論からの展開—』（藤原書店，1995年）
- ・小内透『再生産論を読む』（東信堂，1995年）

- 福島真人編『身体の構築学—社会的学習過程としての身体技法—』（ひつじ書房，1995年）
- 藺田稔『祭りの現象学』（弘文堂，平成2年）
- 柳川啓一『祭りと儀礼の宗教学』（筑摩書房，1987年）
- 倉林正次『祭りの構造—饗宴と神事—』（日本放送出版協会，1975年）
- 柳田国男『日本の祭』（角川文庫，昭和55年）
- 折口信夫『折口信夫全集第十五巻民俗学篇 1』『同 第十七巻芸能史篇 1』『同 第二十巻神道宗教篇』（中央公論社，昭和30年）
- 柳田国男『明治大正世相篇』（上）（下）（講談社，昭和52年）
- 三隅治雄『日本の芸シリーズ—民俗芸能の芸』（東京書籍，昭和58年）
- 松平誠『都市祝祭の社会学』（有斐閣，1990年）
- 岩崎信彦他編『町内会の研究』（御茶の水書房，1989年）
- 倉沢進・秋元律郎編『町内会と地域集団』（ミネルヴァ書房，1990年）
- 鳥越皓之『地域自治会の研究—部落会・町内会・自治会の展開過程—』（ミネルヴァ書房，1994年）
- Claude S. Fischer, The Urban Experience, Second edition, Harcourt Brace Jovanovich, 1984.
- フィッシャー「アーバニズムの下位文化理論に向けて」（奥田道大他訳『都市の理論のために』多賀出版，1983年）
- 松本康「都市は何を生み出すか—アーバニズム論の革新—」（森岡清志他『都市社会学のフロンティア 2 生活・関係・文化』日本評論社，1992年）
- 大谷信介『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』（ミネルヴァ書房，1995年）
- 小林忠雄『都市民俗学—都市のフォークソサエティ』（名著出版，1990年）
- 倉石忠彦『都市民俗論序説』（雄山閣出版，平成2年）
- 『川崎市史—別編民俗』（川崎市，平成3年）
- Michael Ashkenazi, Matsuri : Festivals of a Japanese Town, Hawaii, University of Hawaii Press, 1993.
- Theodore C. Bestor, Neighborhood Tokyo, Stanford California, Stanford University Press, 1989.
- Victor Turner, From Ritual to Theatre : The Human Seriousness of Play, New York, PAJ Publications, 1982.
- Victor Turner, The Anthropology of Performance : Preface by Richard Schechner, New York, PAJ Publications, 1987.
- 神田神社『神田祭』（神田神社，平成8年）：隔年形式の本祭りの祭礼資料である
- はんだ山車まつり実行委員会編『はんだ山車まつり』（半田市観光協会，平成8年）
- 『The Floats of Takayama Festival 高山祭の屋台』（飛騨高山観光協会，昭和62年）
- 木村至宏編『近江の曳山祭』（サンブライト出版，昭和59年）

（原稿受理1997年4月14日）

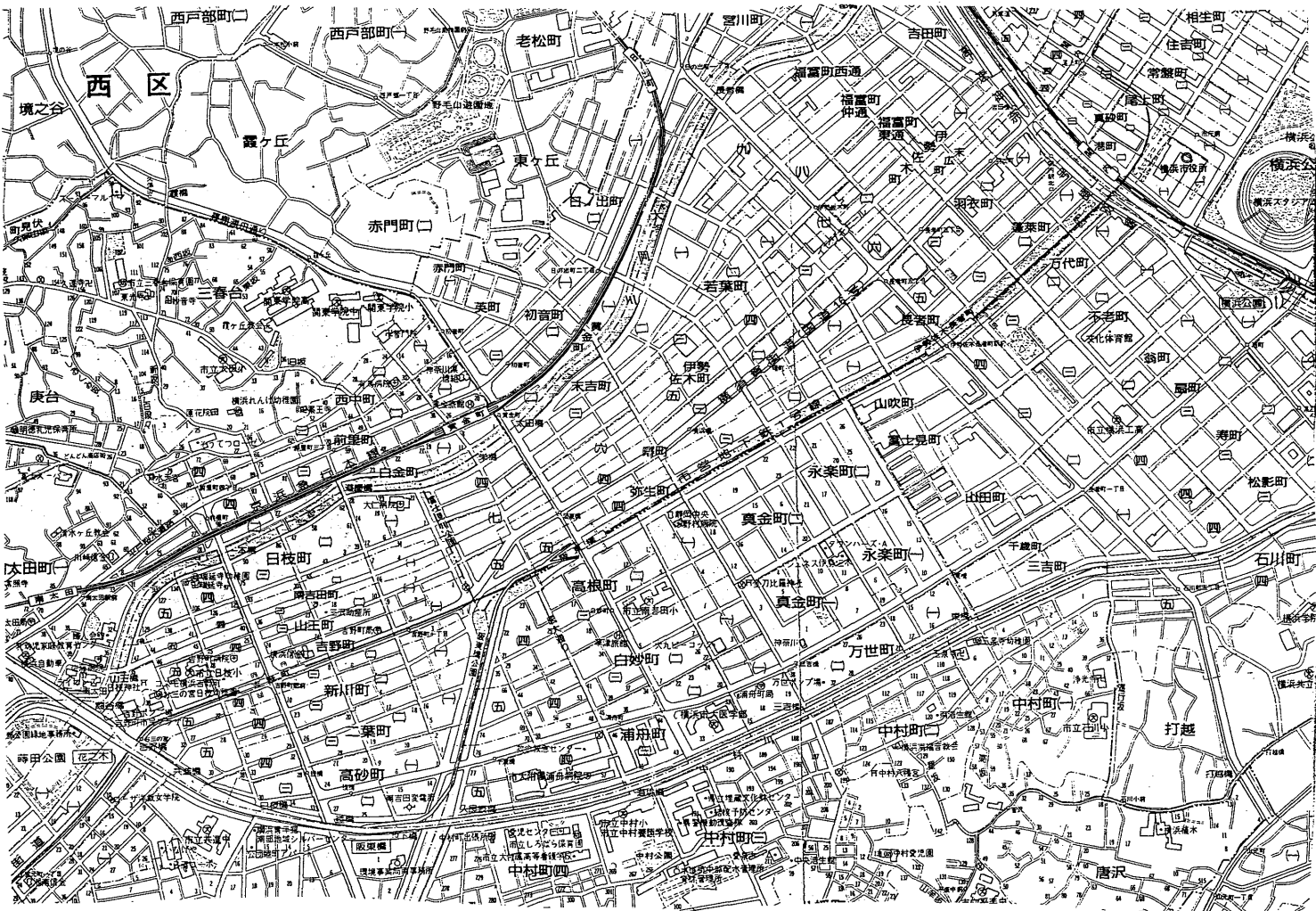


図1 現在の日枝神社(お三の宮)の氏子地域

